

Contents

PLWHA ミーティング	1
難しさと向かうこと	4
G MEETS	6
JASE「授業のための実践セミナー」.....	9
研修報告	9
活動報告	12
お知らせと紹介	16

PLWHA (People Living with HIV/AIDS) ミーティング 「患者のQOLと自己決定」開催

主催 JaNP+ / ふれいす東京
後援 セローノ・ジャパン

JaNP+ (Japanese Network of People Living with HIV/AIDSの略: HIV陽性者の縦断的国内ネットワーク)とふれいす東京の共同主催のPLWHA ミーティング「患者のQOLと自己決定」が9月23日に東京都内で開催されました。HIV陽性者本人を対象に催されたもので、場所は非公開で行われましたが、40名以上が参加。遠方からの参加者や、ベテラン、新人もいり混じっての盛会でした。

全体を通してのテーマは、長期服薬による副作用や容姿の変化、心身への影響とその対策、医療従事者とのコミュニケーションおよび患者の自己決定といったもの。この複合的なテーマを、「生活者としての患者」を中心にして、全人的かつ多面的に捉え直すという貴重な機会でもありました。

コーディネーターナース、医師、NPO相談員、患者という、それぞれに異なった立場のゲストによる、レクチャーやパネルディスカッション、あらかじめインターネットで行ったアンケートの分析結果報告、ヒト成長ホルモン療法の経験があるアメリカの陽性者のインタビュービデオ視聴など、さまざまなアプローチを組み合わせた、内容の詰まったミーティング構成となりました。

QOL (Quality of Life : 生活の質、生命の質) という言葉が、長期服薬に伴う副作用や体型・容姿の変化の出現により、一層クローズアップされています。それぞれの人生観や生活観によってQOLの意味するところは異なり、それは、短期的直接的に生死に関わるレベルでのみ使われる言葉でも、患者の周辺の人間関係や社会環境を無視して考えることのできる概念でもない。それでは、誰がQOLをどのように捉えて、それをどのように他と共有しているのか、あるいは、していないのか。この問いに対し、アンケートも、シンポジウムも一つの方向性を指し示していました。医療者と患者のQOLの捉えかたには差異があることを少なくとも患者は感じているが、一方で、その差異を医療者と共有認識することに、難しさを感じていることが少なくない。そのため、コミュニケー

ションとその機会確保の大切さ、ノウハウの蓄積、コーディネート機能の必要性は以前にもまして大きくなっているということです。そういったことが充足して、はじめて患者の責任ある自己決定が可能なのではないかということでした。

レクチャー 1 : 「患者のQOLと自己決定」

東京大学医科学研究所付属病院相談室・看護師
村上 未知子

HIV感染症治療は、歴史が浅くデータが少ない、そして決定的な治療法がないといった不確実な状況の中で、長期にわたる服薬の自己管理、日常生活上の調整が必要であることが、その特徴になっているとして、HAART時代のQOLとは何かを考えさせられる内容でした。

医療側と患者側のQOLの考え方の違いを整理した上で、EBM(Evidence Based Medicine ~ 科学的根拠に基づいた医療 ~) に対して、NB(Narrative Based Medicine ~ 対話を臨床実践に生かす医療 ~) という概念が同じくらいに重視されつつある傾向と実感をコーディネーターナースという立場から話していただきました。

インフォームド・コンセントについても、情報過多による混乱や、医療者の態度や感情による、患者の情報の受けとめかたにおよぼす影響など、課題が多くあるとのこと。

また、患者の自己決定に必要な要素として、1. 情報を自分なりに整理する時間 2. 悩みや迷いを言語化することによって得られる客観性 3. フォーマル、インフォーマルなサポート資源の主体的活用 この3点を取り上げ、最後には、自己決定に伴う自己責任にも話が及びました。

レクチャー 2 : 「長期内服・副作用・薬剤変更」

国立国際医療センター・エイズ治療開発センター・医師
立川 夏夫

現在のHIV治療における困難を考える上で、長期服用と、

それに伴う副作用の問題が非常に大きなウエイトを占めているとして、「長期」かつ「100%内服」を求められるHAARTの問題点とその理由、現時点で可能な解決方法などを整理していただきました。

リンパ球は長期にわたり体内に存在し、HIVも遺伝子として長期間ヒト細胞に存在しうる。そのため、有効ではあるが完治はしない現時点での抗HIV療法では、長期間ウイルスを抑え続ける必要がある。また、一本鎖のRNAという、転写ミスの起こりやすい特徴を持ったHIVは、多様な変異を持った蛋白構成を持つウイルス群として存在し、薬剤耐性を獲得しやすい。そのために「長期」かつ「100%内服」が必要になる。特に薬剤耐性は、ウイルスが多い段階で発生しやすいため、飲み始めの時期には100%内服の重要度も相対的に高いとのこと。

後半は、各薬剤ごとに特徴的な副作用をあげ、それに対する対処の仕方を、薬剤の変更も含めて、具体的かつ実践的な意見・印象を、臨床医の立場から話していただきました。2003年7月現在のDHHS(米国 Department of Health and Human Services)ガイドラインの第1推奨薬剤を紹介し、耐性変異とその後の薬剤変更の道筋の立て方を考える上では、3TCがキーになること、エファビレンツとカレトラの2強時代に入っていること、高乳酸血症やリポジストロフィーの問題から、d4Tが以前ほど使われなくなったこと、その他、今後導入される新薬の情報なども含めて、盛りだくさんの内容となりました。

web アンケート結果報告：「服薬と副作用に関する調査」
ぶれいす東京 生島 嗣

事前に行われたアンケート集計結果が報告されました。

web上に設置した調査紙により、9月6日から20日までの15日間にHIV陽性者を対象に行われ、重複回答を防ぐ手法を用いた上で、短期間にもかかわらず多数の回答協力を得て、興味深い集計結果がもたらされました。

総数105名 / 年齢：10代～60代 / 告知年：1987年～2003年 / 居住地域は関東地方が最多、次に関西地方、中部地方。海外からの回答もあり / 現在服薬中：67%、過去に服薬経験あり：6%、未服薬：27%、/ 現在、過去に服薬がある人：77名(73%)



web上の質問紙の回答画面

集計結果抜粋

1. 過去に服用したことのある薬剤と、現在服用している薬剤 (N=77)

エファビレンツ<現在35名/過去11名>、カレトラ<12/2>に対して、インジナビル<1/20>、ddl<1/19>。食間薬が、過去には多数飲まれていたが、現在はほとんど飲まれなくなっている。

2. 自覚している副作用の種類(複数回答)

下痢しやすい(45名) 疲れやすい(43名) 吐き気(34名) 睡眠障害(29名)が上位となり、消化器症状だけでなく多様な結果となった。

3. 体型・容姿の変化(N=76)

下腹、頬(そげる) 手足や腕、血管(うく) などに変化を感じている人が多く、いずれも30～40%が「ともある」または「わりとある」と回答。

4. 薬剤の変更と中止(N=77)

変更したことがある人が61%、中止したことがある人が26%。その理由のトップはいずれも副作用の出現。

5. 体型・容姿の変化と社会性(N=76)

周囲から、体型・容姿の変化を指摘されたことがある人が51%。その結果、交流が減ったと回答した人が20%、変わらないと回答した人が68%であった。

6. 副作用、体型・容姿の変化への対処行動(複数回答)

副作用が出現したことを、60%が医師に話しているが、体型・容姿の変化については20%にとどまっていた。

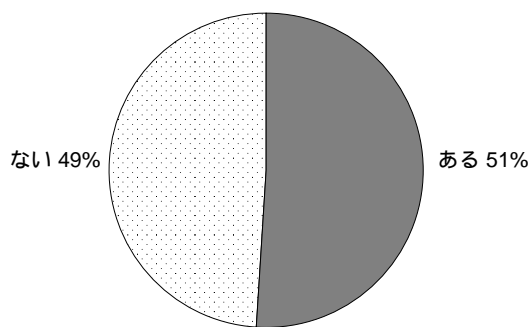
7. 薬剤変更に関する医師の提案に対して、12%が同意しなかったことがある。

8. 薬剤選択の要因(複数回答)

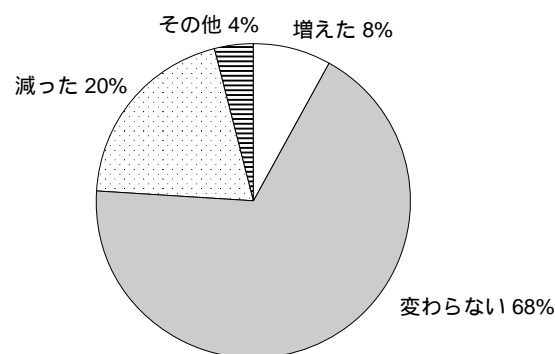
副作用の有無、ウイルス量の減少、CD4値の増加、日常生活への制限、体型・容姿の変化、服薬回数が上位。

また、自由記述の記入が多数、多岐にわたり、数値集計に加えて、よりきめ細かい結果が得られたとしており、今後、さらに分析を進めた上で、陽性者向け、医療従事者向けの情報としての小冊子や、学会での発表を予定しているとのこと。

周囲からの体型/容姿の変化の指摘経験 (n=76)



周囲との交流の増減 (n=76)



パネルディスカッション:「治療継続の困難をどう回避するか」

<パネリスト>

生島 嗣(ふれいす東京専任相談員)

OZAKI 友(HIV陽性者 / JaNP+)

立川 夏夫(国立国際医療センター・ACC・医師)

村上 未知子(東京大学医科学研究所附属病院・看護師)

矢島 嵩(HIV陽性者)

<司会>

長谷川 博史(HIV陽性者 / JaNP+ 代表)

3人のHIV陽性者を含めてのパネルディスカッションは、各陽性者の服薬経験や、医療従事者との関わり方などの具体的な体験談を軸に、医療従事者と患者のQOLの認識のギャップ、時代の変遷とその時々最良の選択や自己決定の難しさ、異なる立場同士のコミュニケーションの重要性など、さまざまな問題提起となりました。

何が副作用かつかみにくいこともままある中で、訴求する患者も、診断をつける医師にも難しさが突きつけられていること、その状況をシェアしきれなかったり、歩み寄ってみたいといった試行錯誤の繰り返しの歴史のただ中にあるということが、浮き彫りになったパネルディスカッションでもありました。

ビデオによるケーススタディ

「副作用の回避について～ホルモン療法経験者のケース」
(提供:セローノ・ジャパン)

アメリカの2名のHIV陽性者による、HIV告知後の治療経験と、その後の体型・容姿の変化、ヒト成長ホルモン治療の経験談をビデオで視聴しました。

ケース1:

バレエダンサーとして働いていたAさんは、告知直後はショックを受けたが、その後ジムにも通い、元気な毎日を過ごして、周囲には病人には見えなかったはずと言う。しかし、1996年前後にHAARTを始めてしばらくして、見た目が変わり始めた。“自分はうまくやっているのに、また厄介なことを背負ってしまった”。リボジストロフィーに対するヒト成長ホルモンの治療に参加。腹の脂肪、体重の変化が期待以上だった。副作用の関節痛もたいしたことはなかったが、個人差は否定しない。やはり、事前の情報を十分に入手、確認しておくことが重要だと考えている。

ケース2:

Bさんは、陽性診断後、インターネットで情報を探し、信頼できる主治医にめぐり会う。その後、長期間治療している人達を見るようになって、リボジストロフィーのことを考えさせられるようになる。やがて、自分の体型にも変化が起きていることに気づいた。“これはジャンクフードの食べ過ぎなんかじゃない!”自分から主治医に提案をしてヒト成長ホルモン療法を開始。副作用は気になったが、効果があったので、中断はしなかった。活気を取り戻し生き生きとした毎日を過ごしている。“外見と心の状態は関連している”と言う。

ミーティング参加者の感想(当日アンケートより)

レクチャー1「患者のQOLと自己決定」について

・医療従事者と患者・感染者のQOLの考え方の違いが少しでも埋まるといいですね。

・現場の看護師の方のお話は切実感があってよかったです。
・医療機関の中で働き乍ら、医師とは又違う視点を持って研究・実践に携わっている姿勢が好もしかった。
レクチャー2「長期内服・副作用・薬剤変更」について
・リボジストロフィーが出やすい薬を飲んでいたので変更しましたが、結果的に正解、と確信しました。主治医とのコミュニケーションを大事ということも改めて思いました。

・各々の人により、副作用の発生に違いがあり、治療薬の選たくのむずかしさをあらためて思った。
・長期的な治療の展望や副作用など、今まで考える余裕がなかったことを意識する機会をもつきっかけとなり、大変有意義でした。

web アンケート結果報告

「服薬と副作用に関する調査」について

・自分と同意見の人の多いことにホッとしたり...今後への不安が生じたりした。(4年~5年のところが要注意、とか...)
・各世代の状況がわかって面白かった。
・限られた時間の中で、「外見の変化」に視点を絞ったコメントに新しい知見が得られた。
・どこか諦めていた部分、容姿にスポットが当たり始めている事に自分の何歩も先に世間が回っている事を心強く思いました。

パネルディスカッション:

「治療継続の困難をどう回避するか」について

・各々のパネラーの方から、本音が聞けて良かった。医師と患者との信頼関係が大切であることが分かった。
・医師とのコミュニケーションをどうとっていけば良いのか、実際に相談してみたかった。
・永い人生における休薬や、医師との意志伝達について、対人間として(医師も生身の人間)役に立ったと思います。
・やはり同じ感染者の話聞くのが、もしかしたら今後起こるかもしれない副作用を自分の身に引きよせて考えられるので、良かった。治療中断という手もある、ということを知った!

ビデオによるケーススタディ

「ホルモン療法経験者のケース」について

・リボジストロフィーでの悩みでとても印象に残ったビデオでした。
・まだ自分の問題としては現実味がなかった。保険を使わず全て自己負担だったらおいくら?
・なんだか、夜中の通販番組のようでした...
・副作用に耐えられた人はいいのだが、それ以外の人はどうすればいいのかというフォローは?

・選択肢が増えることはいいことだ

全体を通しての自由記述

・都会と田舎の治療体制の違い、先生に言えないことも多々ありますが、今回のミーティング等でかなりまた頑張れると思います。
・聞く時間よりも質問できる時間が欲しかった。
・病院だけの情報では本当に何事も選択出来る時代ではなくなったと痛感した。
・投薬がはじまるのがすごくこわくなった気持ちもあります。
・医療スタッフの考えるQOLと患者自身の考えるQOLの違い(と、そのスタンスの違いから生まれる問題)をまさに体感していたところだったので目からウロコでした。

(報告:矢島 嵩)

難しさに向かうこと

様々な立場にある人が、どう難しさに向き合っているのかを取り上げていくシリーズ。第二回は、HIV陽性者の母親にお話を伺いました。息子さんは30代男性で、5年前に告知。その当時のこと、そして現在の親子関係などをお聞きしました。ある個人に起こったことがすべての人にあてはまるわけではありませんが、HIVが陽性者の周囲の人たちにも大きな影響を与えていることがわかります。

(聞き手：生島 嗣)

(02) 母親の向き合う難しさ

“息子として”“ひとりの人間として”
～あらたに始まった親子関係の模索～

いつ頃、どんな場面で知らされたのか、その時のお気持ちを聞かせてください。

体調が悪いと聞き、もしかしてという気持ちがあって、私から検査を勧めました。結果を知らせてくるのが遅いので、不安が募り、待ち切れずに電話をしました。

「ポジティブだった」

「うそ、うそ、うそだと言って」

声にならない声で、叫びました。声はうわずり、体がガタガタ震え、手で体を抑えていなければならない状態でした。今までの日常とは、まったく違った世界になったようで、ものすごく大きな変化がおきたと感じました。

その後、どのような行動をおこしましたか？

当時、私の中では、この病気が死と結びついていたので、息子が死んでしまうとの思いをどうすることもできずに、よくどこでも泣いてました。

しばらく経って、この病気について、いろいろ本などで調べるようになりました。調べれば調べるほど、絶望的な気持ちになりました。その後、カクテル療法とか、薬の選択肢が増えてきたことなど、治療環境が大きく変化してきて、死という意識が薄れ、病気と共に生きる息子の人生を、精一杯応援しようという気持ちになりました。最近では、少し距離を置いて、“親と子、それぞれの人生、お互いに助け合って生きていこう”という気持ちです。

お子さんとの関係は変わりましたか？

誰もが、人生のなかでは病気になったり、事故に遭ったり、思いがけないトラブルに巻き込まれたり、生きづらい条件と背中合わせで生きているのですよね。でも、親は、自分の子供には、そういうこととは無縁で、幸せな人生を送ってほしいと願うものです。

現実として、厳しい条件を背負うことになった息子の人生を思うと、不憫だなあとやりきれない思いにもなりますけれど、息子が一人の人間として、どう生きていくのか、その生き方を見守ろうという思いが深まりました。息子に対し期待することは、このことで、自分への評価を低めないでほしいということです。

でも、時に「なぜ、避けられなかったのか！」という思いに駆られることもあります。

母親、家族として、お子さんとどんな気持ちで接していますか？

はじめの頃は、ただ、辛い思いだけで息子を見ていま

した。この頃は、あまり病気のことを気にかけずに、接しています。時に「あーあ、どんな思いしているのかなあ」と、気になりますけれど、日常では、感染しているってことに囚われなくなったというか...普通に接しています。普通が一番ですよ。

母親、家族として、お子さんに、日常的に何か気をつけていることは？

食事を中心にした健康管理ですね。栄養のバランスとか、なるべく免疫の高まるような食べ物を摂るとか。また、「できるだけストレスをためないようにすることが大事だね」と話しています。そのぐらいですね。あまり、気を遣いすぎると本人も苦痛でしょうから。

最初に役にたったこと、役に立たなかったこと。

最新の医療情報や免疫を高めると言われているいろいろな情報ですね。それと、感染者、患者を取り巻く、制度、支援サービスの情報は、積極的に求めますね。いろいろな情報があるけれど、それがどんな意図で発信されているかが問題だと思います。この病気は性行為と結びついているので、そういったことの延長線上で、興味本位で出されている情報もあるのではないのでしょうか。そういった情報は、本人を傷付けることになるので、やめてほしいと思います。

行政への要望。

感染者、患者のための制度が整備され、利用可能な支援サービスが豊かになって欲しいのはもちろんですが、いくら、ハード面が整備され、豊かになっても、それを感染者、患者が安心して利用できる状況にならなければ、何にもならないと思います。そのネックになっているのは、社会に根付いているこの病気に対する、誤ったイメージ、それによる偏見、差別です。感染者には、自分の感染を明かすことで、周囲の目が変わるのではないかと、生活の基盤を失うのではないかと不安や恐れがあると思います。こうした不安や恐れから、社会サービスを有効に利用できない人は、けっこう多いのではないのでしょうか。

HIV/エイズも単なる病気のひとつだという認識を持ってもらう手立てを、行政が先頭になって講じてほしいと思います。その有効な方策は、やはり正しい知識と、予防行動の普及、啓発です。また、感染者、患者を取り巻く人の輪を、もっと広げていって欲しいと思いますね。そして、感染を隠さずに、それぞれの能力、体力に合わせて働ける、意欲を持って働ける仕事の場の確保、広がりといったことに、もっと、もっと関心を向けてほしいですね。

最近の息子さんの変化は？

最近、「同じ感染者の人とあってみたい」と言うように

なりました。以前は、「ぶれいす東京」の事には、耳も傾けなかったのですが、この頃は自分の方から話題に出すようになりました。幸い、今、体調が良く、この病気に対して慢性疾患に近いというイメージを持つようになったことで、いったんあきらめたことも、何か考えるようになったようです。30歳を超え、人生のパートナーもほしいと思っています。

ただ母親として気になるのは、パートナーは同じ状況の女性がよいと選択肢をせばめている事です。何か息子の現実を見る思いで、母親として辛い気持ちになります。この病気を持つ者への、社会的な圧力が、息子のパートナー選びの選択肢を狭めているのかなあとと思うと……。前向きに、いろいろ考えても、いざ現実的な問題になると、難しい事にもぶつかるのでしょね。息子自身の中にも、この病気であることの負い目があるのでしょうか。

母親としては、そうした息子さんを見てどう感じますか？

親の思いとしては、付き合った人がたまたまそうだったというのなら別だけれど、はじめから選択肢を狭めてほしくないですね。感染していることで、必要以上に自分にたがをはめて生きていってほしくないです。息子は、いろいろな思いのなかで。今はそう考えているのでしょうか。選択肢を広く取って、生きていってほしいですね。

私も、年を取るごとに、「息子も、病気を理解してくれる人と一緒になり、助け合って幸せに暮らしてほしいな」と思うようになりました。こうした思いを持てるのも、息子の体調がよいらなんでしょうけどね。この病気も慢性疾患のひとつと見られるようになってきました。社会の偏見の見方とのギャップをどう埋めていくか、これからの大きな問題だと思っています。

お二人は、昔からそういう会話をフランクにできたのですか？

告知を受けた直後は、「なぜ、避ける事が出来なかったのか」「どうして、自分の身を粗末にしたのか」と責める気もありました。でも、それを口にする事は出来ませんでした。あの時、やり場のない思いを、息子にぶつけた方がよかったのか、ぶつかなかった方がよかったのか、今となってはわかりません。でも、少なくとも今は、私と息子との付き合いは、よい感じかなあとと思っています。

母・息子の距離感に変化はありますか？

30歳を過ぎても、まだ子供扱いしている所がありますね。でも、つながりは深くなったように思います。親の思いだけでしょかね。

息子さんは、将来についてどう思っているのでしょうか？

感染当初は、死を意識したなかで、生きるということに気持ちがいっぱいでした。最近、息子は将来に向けて、資格を取ろうとして動きだしました。生活のための、より確かな足場作りということでしょう。その資格を足がかりにして、将来の生活設計をあれこれ考え、行動を起こしたということは、嬉しいですね。もちろん、体調が変化して、不安定になったりしたらどうしようということも考えますが、まずは、前を向いて、一歩をふみだしたことはよかったなあとと思います。

今後について、どんな風に考えていますか？

「この子は病気なんだ、大変なんだ」と私の思いか

ら、息子の行く手を阻むことのないように気をつけたいと思います。息子には、病気をもっていても、働いて収入を得て生きていくという姿勢を、持ってもらいたいですね。もちろん、何かあれば、親だから支えるけれど、依存的な生き方はしてほしくないですね。ゆっくりと、休み、休めでよいから、精一杯生き抜いてほしいと思っています。

告知をされた5年前と比べて、今のお気持ちはいかがですか？

ずいぶん、楽になりました。病気のことを、いつも思っているわけではありませんし、以前は、四六時中、頭から離れませんでした。今は、この先どんな状況の変化があったとしても、その時、できることを一生懸命すればよいと思っています。そのためには、親も元気でいなくては、お金もある程度は必要ですね。

息子の感染を通し、私自身がこれからどう生きていくかを、問われたように思います。私自身は、なるべく関心ごとのはばを広げ、社会的な活動をしたいと思っています。実際、その一歩を踏み出しました。充実感を求めて生きている母親の暮らしぶりから、何かを感じてくれたらよいなあとと思います。親は親、息子は息子、それぞれの人生をよいものにしていきたいと願うなかで、エネルギーの支え合いができれば嬉しいですね。

このインタビューを読む人へのメッセージ。

感染していない人へ。

この病気は、ほぼ100%自分の意思で防ぐ事ができる病気と再認識してほしいです。感染すれば、やはり、生き辛い条件を背負う事になりますから。自分を大切にしてほしいと思います。そして、あなたの回りにいるかもしれない感染者に、どうか冷たい視線を送らないでください。「自分だけは関係ない」と、言い切れる時代でも、病気でもありません。

それぞれが、それぞれの条件のなかで、肩よせあって、頑張っているのが、この社会なのだから、感染者も厳しい時代を共に生きている仲間だという見方を持っていただきたいと思います。

感染している人へ。

皆、それぞれ条件付きの人生、ちょっと厳しい条件を背負ったけれど、それで、自分への評価を低めないでほしい。夢とか、可能性を封じ込めないでほしいということです。そして食欲に生き抜いてほしいと思います。これが、我が息子も含め、感染者に送るメッセージです。

本日はどうもありがとうございました。

今回、このインタビューの協力を依頼したところ、快く引き受けていただきました。この場を借りて心からお礼を申し上げます。(生島 嗣)



G MEETS

Gay Friends for AIDS では、これまでにない新しいスタイルの学習会づくりにチャレンジしました。研究成果でえられたコンドーム使用を阻害する因子をもとに、その内容をオリジナルのビデオ・ストーリーを通してしながら、観客と一緒にその対応策をさぐるという狙いでした。

G MEETS の活動報告

HIV 啓発イベント G MEETS が 8 月 10 日(日)に新宿文化センター小ホールで開催されました。

来場者数 120 名、出演者 11 名、ボランティア 23 名が参加したイベントになりました。

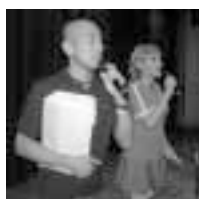
今回のイベントは、『G MEETS ~ 真夏の出会い ~』と題し、これからゲイライフをスタートさせようとしている方、あるいは、ゲイライフをより充実したものにしたいと思っている方へ、楽しみながら HIV 啓発と新しい出会いを提供していこうというイベントです。

< 主催 >

ぶれいす東京 Gay Friends for AIDS エイズ予防財団

< 出演者 >

- ・ エスマラルダ
- ・ ベーすけ
- ・ Badi モデル 2 名
- ・ 大学生サークル代表 6 名



司会進行
ベーすけ&エスマラルダ

< ビデオ撮影協力 >

CLUB Z Jungle Gym mf (メゾフォルテ)

< 音響協力 > Gunsuke

< プログラム内容 >

第 1 部 ビデオ&トーク

ベーすけ&エスマラルダの軽妙な司会で、ゲイ雑誌、Badiのモデル達や大学生サークルのイケメン達に登場してもらい、出会いや恋愛など、様々な場面で起こる状況に、どのようにして対応したらよいかについて、Gay Friends for AIDSのボランティアが総出演した再現ビデオなども交えつつ、トークを展開しました。また、研究を担当した葦田竜也さんからは、研究の結果報告がありました。

第 2 部 2 丁目横断ウルトラクイズ

豪華な景品を用意し、誰も知らないマニアなクイズを出題、参加者を大いに悩ませました。Gunsuke氏による音響効果も会場を盛り上げてくれました。

第3部は、参加者同士の気軽なおしゃべりによって、友達をつくることを目的としていますが、アタックカードなどによって意中の人にアプローチする人もいました。また、ロビーでは、“ガルーダ”さんの占いコーナーが大人気で、行列ができていました。

(報告: ヒロタカ)



Badiモデル、大学生サークルのイケメンに会場ウツトリ。

男性同性間の性行為におけるコンドームの使用 / 不使用方法に関する研究

葦田竜也 (東京大学大学院 / ぶれいす東京)
砂川秀樹 (エイズ予防財団 / ぶれいす東京)
生島 嗣 (ぶれいす東京)
所属は調査時当時のもの

研究要旨

本研究の目的は男性同性間の性行為におけるコンドームの使用 / 不使用方法の背景にある要因をあきらかにすることであり、パートナーの関係性や性行為における役割の違いなどから検討をした。ゲイ / バイセクシュアル男性のフォーカス・グループ・ディスカッション (以下FGD) に引き続き、関東圏を中心に、東京レズビアン & ゲイ・パレード 2002 (2002年9月7日 ~ 8日) の参加者、大学を中心としたゲイ・サークルそしてゲイバーの利用者に研究への協力を依頼し、無記名自記式質問紙を用いて実施した。有効回答数はn=303、対象者の平均年齢は中央値で27.0であった。FGDの分析結果を、若年女子 / 男子を対象とした異性間性行為に関する調査結果と比較することにより、因子の共通点と相違点が明らかになった。質問紙を用いた因子分析の結果からは6つの因子が抽出された。コンドーム使用行動に強く関わっていたのは使用意志であったが、パートナーの種類や性交渉における役割によって、コンドームを使用しない頻度には相違が見られた。

「男性同性間の性行為におけるコンドームの使用 / 不使用方法に関する研究」は、平成 14 年度・厚生労働科学研究費補助金による、「エイズに関する普及啓発における非政府組織 (NGO) の活用に関する研究 (分担研究者: 池上千寿子)」の一部として実施されましたもので、G MEETSは、その研究結果をふまえて、平成 15 年度・エイズ予防財団主催の研究成果等普及啓発事業として、ゲイ・バイセクシュアルを主な対象として開催されました。

VIDEO での阻害因子への啓発

研究結果から得られた因子の一部を4編のVIDEOストーリーに盛りこみ、見た人が具体的にイメージしてもらうことをねらった。出演は、Gay Friends for AIDS スタッフによる。

VIDEO 1 因子：相手依存

“セックスの場にコンドームがないと、ついゴムなしでセックスをしてしまう”

ハッテン場にはじめていくA男。当然、受付でゴムをもらえると思っていたが、もらえずに焦る。しかし、せっかく来たんだし、ちょっと覗いていかと入場するが、超タイプのイケメンと出会い、相手もまんざらじゃない様子。きっと相手が持っているはずと思ったが、実は……。



VIDEO 2 因子：相手のムード優先

“タチがコンドームつけるあいだ、ウケが待っているという雰囲気がいやだ”

彼氏とラブラブの時間を過ごしているB雄。寝る前に、いいムードになるが、ウケが待っているのは、いや。「はやく〜」とせがむ。「だって、コンドームをつけると、流れがとまって、ムードぶちこわしじゃない?」と険悪ムードに。



VIDEO 3 因子：場のノリ優先

“コンドームをつける行為はハッテン場の雰囲気をこわす”

C吉はハッテン場によく行く。しかし、ハッテン場では、野郎っぽいオラオラ系な自分を演出しないと、モテないと思いついでいる。しかし、心のなかでは、オネエ言葉が飛び交う。C吉は、コンドームをつける行為はハッテン場の雰囲気をこわす、野郎っぽい演出が崩れてしまう、と思いついでいる。本当はゴムを使用したいと思いついながらも、見られると使えない結果に……。



VIDEO 4 因子：相手依存

“信用している相手/知っている相手とはコンドームを使わないでセックスしがち”

D夫は、いきつけのゲイバーで、時々見かけるEのことがずっと気になっている。Eは人柄もいいし、信用できそう。ある晩、ゲイバーのママの手助けもあり、二人で話すチャンスが訪れる。そして、ついに、一緒に帰ることに…。しかし、その日はゴムを持っていなかった。でも、彼は信用できそうだし……。大丈夫!?



どう啓発につながるのか?

ビデオにて失敗するストーリーをみてもらった訳だが、そのまま、観客を帰す訳にはいかないなので、それぞれの状況に対する対応策を提案した。

Hの強化書・特別編 ~ Hの偏差値向上大作戦 ~

僕らの恋やHにまつわる様々な悩みや葛藤。なかでも、「コンドームを使いたい」と思っているが、できない、という悩みを抱える人は少なくありません。そこで、ぶれいす東京が行った男性同性間のコンドーム使用に関するアンケートの成果をもとに、Hの偏差値を向上させる4つのアドバイスを提案してみました。僕たちのセックスライフが、もっと充実するために...

1) 恋は無防備。愛や信頼では感染は防げない!

信用している相手、知っている相手だと、ついついコンドームを使わないでセックスしがち。

しかし、HIVをもっているかどうかは、外見からでは判別できない。前から知っている人だろうと、ルックスが信頼できそうでも、感染の可能性を知る手がかりにはならないことに注意しよう。

HIVは性の健康の問題。いつでも/誰とでも使うことが大事。愛や信頼があれば、なおさらお互いの健康のことを考えよう!

2) ウケもタチもコンドーム。アピールはパンツを脱ぐ前に!

ハッテン場や初めてのデートで、相手がコンドームを持ってなくて、そのままセックスしちゃった、なんて話は意外によく聞く。

相手に期待するより、少しでもHの可能性があれば、念のため自分で用意することが肝心。相手がコンドームを持ってない時には、自分から、Hなノリで装着しよう!

3) ハッテン場でもコンドーム。「ゴム使って」は好印象!

ハッテン場で、周囲に見られている時、コンドームをつけるのは恥ずかしいとか、雰囲気壊すんじゃないかと心配している人は多い。

しかし、それは大きな勘違い。ぶれいす東京が1999年に行った調査では、ハッテン場でコンドームを使うと、9割以上の人は、相手の印象がよくなる/かわらない、と回答している。ハッテン場でも、自信をもってゴムを使おう!

4) 「はやく~」の声にはテクで対処。

体のパーツを総動員して間を埋めろ!

タチがコンドームをつける間がじれったい、セックスの流れが止まってしらけちゃう...

そんな悩みには、両手、両足、口などの体のパーツを総動員したテクで対処!

コンドームをつける間に、あまっている手や足、口で、相手の乳首やほかの性感帯を刺激しよう。ただし、テクの熟練には、コンドームに慣れていることが必要。日頃から、オナニーのついでにゴムトレで鍛えよう。タチがトレ不足の時には、ウケが積極的に装着を手伝ってあげるという手も。セクシーな装着法のテクを磨き、楽しくHなセイファーセックスを楽しもう!



今回は部分的に研究成果を利用した予防啓発の資材を紹介しましたが、今後、「Hの強化書・特別編」はGay Friends for AIDSのサイト上で紹介していく予定です。

G MEETS アンケート集計結果

今回のG MEETSでは、来場者数120名、司会及び出演者11名、ボランティアスタッフ23名の計154名が参加した。

このうち来場者120名にアンケートを依頼、68名(平均年齢27.8才)から回答を得られた。

G MEETSを知った方法は、フライヤー23.5%(16名)、雑誌4.4%(3名)、インターネット29.4%(20名)、友人・知人52.9%(36名)、その他1.5%(1名)であった。回答者の内、メディアで知って来場された方が、50%を超えたことをうけ、宣伝効果はかなり出ていたものと思われる。今後のイベントでも宣伝に力を入れて、より多くの来場者を期待したい。

G MEETSへの参加目的は、HIV/AIDSの情報を得る26.5%(18名)、他のゲイとの出会い36.8%(25名)、トークショーを見る27.9%(19名)、友人の出演を見る36.8%(25名)、その他5.9%(4名)、特になし5.9%(4名)であった。出会いを求めて来場した方が多く、G MEETSというタイトル通りに来客者をつかめたのではないと思われる。

G MEETSに参加して良かった点は、HIV/AIDSの情報を得られた52.9%(36名)、友人が出来た10.3%(7名)、ゲイとして、新しい一歩を踏み出せた13.2%(9名)、その他8.8%(6名)、特になし14.7%(10名)、無回答13.2%(9名)であった。HIV/AIDSについての情報を得られたという意見が多く、研究発表会として期待通りに進んだことは嬉しい。しかし、友人が出来た方が少ないようだったので、今後開催するにあたって、より「出会い」をしやすいシステムを導入するなどの工夫が必要であると感じた。

次にセックスをするとき、コンドームを使用するか否かについては、絶対使用する33.8%(23名)、使用する38.2%(26名)、たぶん使用する11.8%(8名)、わからない8.8%(6名)、使用しない4.4%(3名)、無回答2.9%(2名)であった。回答者の内、コンドームを使用する意志がある方が83%を超え、Safer Sexについて、前向きな考えを持った人が多かった点が、非常に嬉しい。今後モイイベントで、Safer Sexについて沢山の方が考え、前向きに思ってくれることを期待する。

わたしは、第二部で司会をやったのだけれど、クイズでお客様のハートをつかめたか不安だわ。緊張しすぎたから、今後(あるのかしら?)出演するときは、もっと女優として磨かなきゃ。あと、カイヤに似ていたみたいだからカイヤ・あにーたに改名しようかしら?(笑)

イベントとしては、ギリギリまで準備をして大変だったけど、成功して良かったわ。みなさんお疲れさま!今後も素敵なイベントを作っていきますよ。

VOICE03 頑張るわよ!!!

(アンケート集計報告:あにーた)

JASE「授業のための実践セミナー」報告

JASE(財団法人 日本性教育協会)が主催し、ぶれいす東京が企画・運営を担当した連続セミナーの第一回目が、2003年8月24日に開催され、25名の参加がありました。

「性教育セミナー運営に参加して」

ぶれいす東京研究グループ 兵藤 智佳
助産婦グループ、悩める教師たち、現役学生たちのグループ、などなど、「ぶれいす東京」企画の性教育セミナーは、年齢や職業が異なる、さまざまな経験を持つ人たちが、積極的に意見を交換する場となりました。午前中のグループ参加型ワークショップは、「現在の性教育の現場の抱える問題」が、多様であることを知る一方で、同時に、そこには、「共通する課題」があることも実感させられるものでした。同じように性教育に携わっていても、それぞれの個人が、「違った見方や異なる解釈がある」ことを知ったり、気づいたりすることは、「性教育」の実践の場では、とても重要なことです。それは、「自分の偏り」に、気づいていく自身の実践のプロセスでもあります。午後は、ぶれいす東京制作のビデオ鑑賞でした。「理想的すぎる」、「個人の細かな心理的な葛藤が描ききれてない」などの意見が寄せられた一方で、ビデオは、「あなたならどう感じる、どうする」という「問いかけ」のあしがかりになるとのコメントもあり

ました。教材は、あくまで教材です。それを使って教育、啓発をどう展開するか、ワークでの議論は、参加者に、それらのヒントを提供できたのではないのでしょうか。次回のセミナーに、さらに期待しつつ。

授業のための実践セミナー参加者募集

一回だけの参加も可能。

授業の材料やヒントが得られます。

第2回 12月13日(土) 10:30~16:30

第3回 12月14日(日) 10:30~16:30

第4回 2月1日(日) 10:30~16:30

問い合わせ

日本性教育協会 TEL:03-6801-9307

FAX:03-5800-0478

E-mail:info@jase.or.jp

http://www.jase.or.jp

研修報告

ぶれいす東京では、新たに活動への参加を希望する人のため、3日間の新人スタッフ合同研修会を開催しています。この研修では、基本的な知識を得ると同時に自分自身を振り返り、どのように活動に参加するかを見極めます。また、研修後は、電話相談やパディなど、活動ごとに追加の研修が開催されます。希望者は、すべての研修(補講あり)を終了し、活動に参加することになります。また、すでに活動に参加しているスタッフのために合同宿泊研修会を開催し、部門を超えた横の連携強化を試みています。

新人スタッフ合同研修会

2003年7月6日にオリエンテーションを開催しました。その結果、32の方が新人研修会に参加を希望され、豊島区立生活産業プラザにて、7月21日、7月27日、8月3日の10時~16時に研修が行なわれました。参加者にとっては知識を増やすと同時に、性に関する自分自身の価値観や態度をふり返る場でもあります。

研修は講義形式、ワークショップを取り混ぜながら実施されますが、内容は、社会的な背景、プライバシー、HIV&感染症の基礎知識、セーフターセックス&コンドームの知識、HIV感染後の生活、セクシュアリティ、エゴグラムと交流分析、福祉の制度、相手のある保健行動など多岐に渡ります。

「研修を通して感じたこと」

小川 智子

研修はパワーが生まれる場だと思う。日常生活の中で心から人の話を聞くことや、聞いたことに対して深く考えるということは意外に少ないように思う。しかし研修のプログラムの中では何度となくそのような場面に出会う。例えば、3日目に行われた「感染者の手記を読む」というプログラムの中では、感染者の手記を読み、それぞれ感じたこと、考えたことなどをグループに分かれて話した。1人1人が自分と向き合い、今まで思っていたことを強くする人、新たな思いに出会った人など様々であったが、静かな語り合いの中に、何かが生まれていたように感じた。

また自分の持っている思いこみや価値観に気づく場でもあると思う。ぶれいす東京には年齢、人種、セクシュアリティなどが違う様々な人が集まる。私が前回研修に参加した時に、「SAFER SEX WORK リスクアセスメント」のプロ

グラムにとっても抵抗があった。HIV/AIDSとSEXは切り離せないものということは知っていたながら、口にだす恥ずかしさを感じ、戸惑いを覚えながら参加した。しかしこの行為はリスクが高い、低いなどと分けて考えていく内に、自分は「SEX = 感染する」と思い込んでいたことに気づいた。そのような発見が研修中随所にあり、すぐには消化できずにいたが、今はやったことに意味があると感じている。

今回の研修に参加した方々も発見の中に、戸惑いを覚えたところもあったように思う。しかしその戸惑いが、自分があたりまえと思っていたことから1歩踏み出すきっかけになるように思う。研修を通して今後の活動や、自分の生活に少しでも良い変化があれば、3日間同じ時間を過ごした者として嬉しいかぎりである。

「HIVとの関わり～アフリカ、そして日本～」 伊藤

私がHIV/AIDSについて考え出したのは今から5年前、学生の時代。途上国、特にアフリカのHIV/AIDSの関連文献を読みあさった。

その後、東アフリカのタンザニアで働いていた時に、治療できる日和見感染でも薬が買えないため治療できずに亡くなっていく人を目の当たりにし、PLWA (People Living with AIDS) ということで差別に遭っている友人、エイズ孤児やPLWAの親の世話をしている小学生の子どもたちに出会い、何らかの形でこの問題に関わりたと思った。そこで、地元のNGOのボランティアとして、中学生を対象とした啓発教育や、月一回のPLWAミーティングに関わった。

帰国後、日本の状況はどうだろうかと思っていた時に、知人より、ぶれいす東京を紹介してもらい、この夏のボランティア研修に参加した。研修を通して、日本のPLWAもいろいろな問題に直面していること、ケアの面でのニーズが高いことを知り、自分のできる範囲で関わっていきたいと思った。

「私の意識革命が始まった！」 白川 聖啓

開始30分前に起床し、滑り込みセーフで参加したオリエンテーションを皮切りに、ぶれいす東京プロデュースの私の意識革命が始まりました。文字に起こすことに戸惑う言葉が飛び交ったり、あまりにわかりやすく衝撃を受けたコンドームの使用法説明、感染者の手記など、合同研修で出会ったことは全て私にとって寝耳に水でした。

そして研修が進んでゆくに連れて、一つの疑念が湧いてきました。私が寝耳に水と感じたことを、ただ「寝耳に水」で済ませてしまっただけなのかという問いかけでした。それは私の不勉強に起因する所も多いと思いますが、必要な情報を「寝耳に水」へと変えてしまう社会の風潮があるのではないかと、私は感じました。

ここには書き切れないほどの思索の種を私に提供してくれた合同研修は、本当に意義深いものでした。それもこれも全ては、グランドルールの根幹をなす「個の尊重」の恩恵で、様々な「パートナー」に出会えたからだと思はれています。

ホットライン部門・新人スタッフ研修会

ホットライン部門では、先に行われた合同研修の後、さらに8月24日、31日と2回の研修を行いました。この研修はボランティアの電話相談スタッフとなる前に、電話相談の特徴や相談を受ける際の姿勢・立場などを理解していただき、かつ実際の相談がどのようにすすめられているのか、ロールプレイなどを通して学んでいくことを目的としています。今回は、3名の方がホットライン部門での活動を希望され、参加してくださいました。

講義はまず「HIV/AIDSの電話相談とはなにか」から始まり、守秘義務の厳守、電話相談ならではの～緊急性がある、匿名性があり秘密が守られやすい、継続相談ではないので一期一会～についてや、「ぶれいす東京の立場」として、セクシャリティの多様性への肯定的姿勢、相談者の自己決定を支援する、といったことをお話ししました。同時に、次のコマでは「ピアカウンセリング」の講義が行われ、ノンジャッジメンタル～相談者に対して価値判断を行わない～、まず始めに相談者の感情をうけとめる、といった原則などの説明を行いました。

上記を通じて、この相談は専門家によるものではなく「ピア～仲間～の立場で話を聴いていくものです」ということを強調するものでしたが、実際の相談になるとなかなか原則通りにはいかないことが出てきます。講義の後は実践にむけて、相談者役と相談員役、その相談を聴く役、とそれぞれの役になってもらいロールプレイを行いました。これまで習得したHIV/AIDSに関する知識を情報提供しながら、かつ相談者の話しやそれに伴う感情をしっかりと聴いていく、ということにこの他、皆さん難しさを感じたようです。研修にはホットライン部門の現役スタッフも参加しており、相談終了後のふり返りの大切さなどが話されました。

以上が部門研修の報告となりますが、その後も、実際の相談を聴く「モニタリング」そして「実地研修」と研修は続いています。多くの時間を割いて励んでいる新人の皆さん、そして研修に参加して下さったスタッフの皆さん、この度はありがとうございました。そして今後ともよろしく願いいたします。

(山里)

バディ部門・新人スタッフ研修会

去る9月14日に、バディ研修の最終項目のバディワークショップを新宿消費生活センターにて開催しました。今回の参加者は7月～8月の合同研修終了後の希望者、および個別研修の終了者9名のうち、参加可能な6名となりました。ワークショップは実際の活動の前に、バディの役割、自分の活動について、ワークを通じ参加者それぞれに考えてもらう場となっています。またその中では、細部にわたるクライアントの生活や置かれている社会的状況について、仮想したり、実際の話をつらつらしています。

1日がかりのワークで大変だったと思いますが、参加者全員が無事終了しました。終了した皆様、早速活動に入る方もありますが、今後ともよろしく願い致します。

(牧原)

合同宿泊合宿研修

初の部門合同の合宿！

今回は、実に約40人のぶれいす東京スタッフが参加しました。性別、セクシュアリティ、年齢がさまざまな参加者が町田の某企業研修所に集いました。参加者は、こうした違いをむしろ楽しむかのように、ぶ PEP仕切りのワークショップにて、共に楽しく過ごしました。お互いの違いに注目するよりも、一緒に楽しめる雰囲気がとても居心地のよさにつながっていたように思います。

参加者感想文

去る6月28・29日に南町田でHL・パディ・Gフレ・ぶ PEPスタッフ合同の宿泊研修が行われた。やっぱり頑張ってしまう風船ゲームで頭と身体をほぐし、自己紹介。互いに顔がわかり始めた後、『コンドームがないと最中にわかった時、どうセイファーセックスを継続するか』という俳優の卵も真っ青なシチュエーションの寸劇を演じる。実に名演？迷演？続出となり、『オスカーはどこに？』審査員も頭を抱えて迷いに迷うこととなった。

各部に分かれての勉強会で、HLは長坂先生を迎え、今直面している神経症的な相談対応について学ぶ。仲間と共に学び、情報を共有できると安心して再び電話対応ができることを実感する。

豪華ディナーの後、華麗なまろんず SHOWで盛り上がり、第一日目はフリータイムに突入。明けて二日目。HLは陽性者対応事例の研究を生島さんの指導で学ぶ。以前からその必要性を感じていたので、大きな収穫であった。各部でできていること・限界を発表するメニューは、自分たちの活動を自覚するとともに他部を知ることができるスグレモノであった。

終了する頃には目に見えないおみやげが手に持ちきれないほどいっぱい。この研修を企画準備して下さったスタッフに感謝感謝。再見！

(ホットライン：MT)

普段顔を合わせる事のないパディ、HL、Gフレのメンバーと情報交換や懇親会ができて横のつながりができて楽しかったです。また合宿時にプログラムを進行することで、ぶれいす内でのぶ PEPの存在、そして活動内容を皆さんに理解していただくことができたと感じます。コンドームネゴシエーションでは急にも関わらず、みなさんすばらし



夜の懇親会、「初めてまして！」
部門を超えて輪が広がる。



池上代表を囲んでのしゃべり場

いお芝居を披露して、プログラムを盛り上げてくださってありがとうございました。ぶれいす東京には本当に役者が多くですね。皆さんが楽しみながらプログラムに参加してくださっていたようなので、嬉しかったです。これらのことが、これから先も活動を続けていくための私たちのモチベーションにも繋がりました。

(ぶ PEP：いみ、みず、また姉、とも)

日頃、Gay Friends for AIDSの活動の中で別部門の方々と接する事が少なく、どの部門がどのような活動をしているか、活動報告でしか得られなかったのですが、今回、初めて「合同宿泊研修会」に参加させていただき、各部門の活動内容や問題点及び目標などをシェア出来た事はとても有意義でした。そしてどの部門の活動も全てリンクしているのだと実感しました。

(Gay Friends for AIDS：北村亮壱)

普段は顔合わせの少ない各グループメンバーが一同に会する。一部メンバーでは掛け持ちが仇になり「裏切り者！」と揶揄される。(嘘です)

全体の各グループが共通のベクトルを持ち、「コミットできている喜び」「コミット不足」等について話し合い、また他グループが各それぞれの活動に耳を傾け、気づきと振り返りを認識し新たなモチベーションを胸に無事終了。充実の合同研修会でした。次回は参加できなかったメンバーさん是非にも参加していただきたいと思います。

(Gay Friends for AIDS：ケンイチロウ)

ホットライン部門が宿泊研修をすると聞いて、パディ部門もしたいなと思っていたところ、ぶ PEPやGフレも合わせて初めての合同宿泊研修が実現した。

ぶ PEPのワークショップでセクシャルヘルスについて考えたり、しゃべり場にいるんな年代のバラエティに富んだ背景を持ったメンバーの話を聴いたり、池上さんの研究について説明してもらったりできた。

ぶれいす東京という名の下に、それぞれの部門で各々違った活動をしているが、得意不得意や活動できる時間帯に合わせて無理なく参加できることがいいなあと感じ、パディの一員として活動できることに喜びを感じている。今までやってきたことをふり返って、もう少し居させてほしいなと感じた合同研修会でした。

(パディ：九岡)

活動報告

各部門より

● ホットライン

ホットライン・ミーティング実施状況 ()内は出席人数

3月	7日	東京都電話相談連絡会(3名)
	16日	スタッフミーティング(7名)
	23日	世話人会ミーティング(7名)
	24日	東京エイズ相談連絡会 「ボランティア活動」(参加1名)
4月	11日	東京都電話相談連絡会(3名)
	13日	世話人会ミーティング(7名) スタッフミーティング(13名) HL部門お花見会
5月	9日	東京都電話相談連絡会(3名)
	18日	スタッフミーティング(8名)
	26日	東京エイズ相談連絡会 「検査体制の現状と課題」(参加3名)
6月	13日	東京都電話相談連絡会(3名)
	15日	世話人会ミーティング(6名)
	29日	スタッフミーティング(1名)
7月	11日	東京都電話相談連絡会(3名)
	27日	スタッフミーティング(14名)
8月	8日	東京都電話相談連絡会(3名)
	23日	スタッフミーティング(10名)
	24日	HL部門新人専門研修・一日目(10名)
	31日	HL部門新人専門研修・二日目(10名)

相談実績報告

ぶいす東京エイズ電話相談

	日数	総時間	相談員数
3月	5日間	20時間	のべ15人
4月	4日間	16時間	のべ12人
5月	4日間	16時間	のべ12人
6月	5日間	20時間	のべ15人
7月	4日間	16時間	のべ12人
8月	5日間	20時間	のべ15人

	相談件数(男性)	女性	陽性者	1日平均
3月	37件(33件)	4件	0件	約7.4件
4月	27件(20件)	7件	1件	約6.8件
5月	23件(17件)	6件	0件	約5.8件
6月	46件(41件)	5件	1件	約9.2件

7月	28件(22件)	6件	1件	約7.0件
8月	40件(26件)	14件	0件	約8.0件

東京都夜間・休日エイズ電話相談 (委託)

	日数	総時間	相談員数
3月	14日間	42時間	のべ37人
4月	12日間	36時間	のべ33人
5月	14日間	42時間	のべ36人
6月	13日間	39時間	のべ36人
7月	12日間	36時間	のべ29人
8月	15日間	45時間	のべ38人

	相談件数(男性)	女性	陽性者	1日平均
3月	252件(212件)	40件	0件	約18.0件
4月	206件(160件)	46件	2件	約17.2件
5月	261件(229件)	32件	9件	約18.6件
6月	234件(191件)	43件	0件	約18.0件
7月	218件(184件)	34件	1件	約18.2件
8月	276件(212件)	64件	0件	約18.4件

今年は例年にはない動きが見られました。毎年夏には減少するはずの相談が逆に増え続け、内容も時節にとらわれことなく、コンスタントに感染不安が持ち込まれるなど、ニーズの変化が感じ取れます。新たなスタッフも迎え、より良い対応を目指すべく、柔軟な姿勢と絶え間ない努力を目標としていきたいところです。



電話相談の様子

ぶい PEP

ぶい PEP ミーティング実施状況

3月	6日	定期ミーティング
4月	3日	定期ミーティング
5月	8日	定期ミーティング
6月	5日	定期ミーティング
6月	28日	合同宿泊研修会ミーティング
7月	3日	定期ミーティング
7月	27日	反省会兼懇親会
8月	7日	定期ミーティング
8月	27日	臨時ミーティング

ピアプログラム実施状況

	派遣先	人数	PEPメンバー
3月17日	広尾高校	40名	5人
3月19日	八王子工業高校	210名	6人
3月24日	竹台高校講演	200名	1人
6月10日	戸山高校	120名	7人

その他

3月30日	まるんずナイト参加
4月17日	ぷ PEPミニ説明会@事務所
8月3日	新人合同研修会にてコンドーム付けワークショップ

バディ

バディ担当者ミーティング参加スタッフ数

(第1木曜 11:00 ~ 第3木曜 18:30 ~)

3/6	3人	3/20	7人
4/3	5人	4/17	8人
5/1	6人	5/15	7人
6/5	5人	6/19	6人
7/3	6人	7/17	9人
8/7	5人	8/19	8人

利用者数 (2003/3 ~ 2003/8)

6カ所の病院に通院中、もしくは入院中の18名の方に20名のパディスタッフを派遣。

新規派遣

引っ越しの手伝い・買い物	1件
入院中の洗濯	1件
入院中の洗濯・外出付き添い	1件
引っ越しの手伝い	1件
自宅への定期的な訪問	1件
合計	5件

訪問先 (2003/8月末現在)

在宅訪問	10件
病室訪問	3件
在宅への電話のみ	1件

派遣終了

入院中の洗濯	1件
入院中のみの短期派遣、退院による終了	
入院中の買い物	1件
ニーズの消失	
引っ越しの手伝い・買い物	1件
ニーズの消失	
自宅・病院への訪問	1件
クライアントの死亡	
合計	4件

バディ担当中のスタッフ構成 (8月末現在)

女性15名 男性5名

バディの現場から

今年度に入り、短期派遣のものを含めて、新規の派遣が定期的に入るようになりました。また派遣中のものでも、パディスタッフの増員や調整などがいくつかありました。

依頼が増えるなか、人員の調整に困ることもありました。これまで活動の久しくなっていた方、新規に登録した方など、多くのバディの方にご協力いただいたおかげでなんとか派遣を行うことができました。どうもありがとうございました。

また、9月のワークショップでは6名の方が研修を終了し新たにバディとして加わりました。このうち7~8月にかけて行われた合同研修の終了者(補講も含む)が5名です。

新規に登録した方、待機中の方にも、今後また何かと連絡がいくかもしれません。もし、都合がよければぜひ活動にご協力下さい。また、活動したいのに依頼がないぞ!という方も担当まで抗議の連絡を。よろしくお願いいたします。

ネスト

ネスト利用状況

	オープン日数	延べ利用者数	(うち新規)	(うち積極的な参加*)
3月	26日	122名	(7名)	(12名)
4月	26日	99名	(3名)	(2名)
5月	26日	134名	(5名)	(8名)
6月	27日	134名	(5名)	(5名)
7月	28日	107名	(7名)	(8名)
8月	23日	104名	(7名)	(10名)

(*積極的な参加とは、新人ピア・ミーティングのファシリテーター、web NEST運営委員会、お茶会・講習会の企画や主催など、ネストの運営やプログラムに積極的に関わっていること)

ピア・グループ・ミーティング (PGM) / その他

- ・新人ミーティング第11期 (参加者6名)
3/7 3/21 (修了)
- ・新人ミーティング第12期 (参加者5名)
4/5 4/19 5/3 5/17 (修了)
- ・新人ミーティング第13期 (参加者5名)
6/27 7/7 7/25 8/8 (修了)
- ・新人ミーティング第14期 (参加者5名)
8/23
- ・PGM・ファシリテーター・ミーティング
(ピア・ファシリテーター、スタッフ・ファシリテーター)
3/27 (4名、2名) 5/22 (3名、4名)
8/18 (4名、4名)
- ・陰性パートナー・ミーティング
3/8 4/12 5/10 6/14 7/12 8/9
- ・ミドル・ミーティング 3/8 4/12 5/10 6/14
7/12 8/9
- ・生活保護についてのミーティング 4/19
- ・もめんの会 (HIV/AIDSを支える母親の会) 4/25
- ・結婚している男性の妻への告知についてのミーティング
6/7

- ・母親の会（もめんの会から派生した集まり）
8/30
- ・web NEST 運営委員会（旧 HP ミーティング）
（陽性者メンバー、ぶれいす東京スタッフ）
3/28（2名、2名）
5/9（3名、2名）
6/20（2名、2名）
7/18（2名、オブザーバー2名、2名）
8/22（2名、オブザーバー2名、2名）
- ・web NEST 運営委員会ホームページビルダー学習会
7/31（2名、1名）

ネスト・プログラム

- 3/1 誰でもわかる HIV 基礎講座（参加者2名）
- 3/1 ネスト庵春のお茶席（ご亭主1名 参加者9名）
- 3/15 アロマセラピー講座4（最終回）
（講師1名 参加者14名）
- 6/6 就職希望者のための情報交換会（参加者8名）
- 6/14 ネスト庵初夏のお茶席
（ご亭主2名 参加者9名）

就職希望者のための情報交換会

去る6月6日（金）19時30分から約2時間、現在求職活動をしている人や、今後就職・転職を計画している方々のための情報交換会を開催しました。

今回は、障害者枠での就職についても検討してみよう！ということで、障害者の就職に関わっている専門家お二人をゲストにお招きし、実際に障害者枠での就職が決まった方に、司会進行役をかって出してもらいました。

参加者はその他に13名。就職活動中の方やバイト・派遣の方など、それぞれの立場からの経験談、苦労話が語られました。また、一般枠と障害者枠の違いやメリット・デメリット、企業の障害者雇用状況や人事担当者の意識、障害者合同相談会での心得・まる秘テクニックなど、専門家の方々からいろいろなお話を聞くことが出来ました。また、ひとりで頑張るのではなく、いろいろな機関に相談してみてくださいとのことでした。

最後に、引き続きこういった情報交換会を継続していきたいとの声が聞かれました。

Gay friends for AIDS

<http://gf.ptokyo.com>

出会いと研究発表を同時に開催！「G MEETS」
2003.8.10

真夏らしいお昼に開催（会場12:30）された「G MEETS」。あまりの天気の良さに最初は動員数が危ぶまれたが、出足が遅かっただけで最終的に約120名の観客動員を好記録。当日はゲイ雑誌で有名な「Badi」のモデル、大学生サークル、ドラッグクイーン等たくさんの方に協力出演いただき華々しい研究発表会となる。

そこでは「実際のSEXの場面で、どういったことがコンドーム使用の阻害要因になるか」等が発表され、各「阻害要因」テーマ別にビデオ（Gフレメンバーの体当たりの女

優ぶりが顕わに！）が4パターン上映され、わかりやすい研究発表会とHIV予防啓発となる。

研究発表会後、ねるとん「真夏の出会いG MEETS」に早変わり！「くっつけパバァ」なるくっつけ隊がフロアを「総お見合いロビー」に変化させる。その場でできたカップルは最初から「セーファーセックス」率が高いとか。（噂）（私事ではございますが、最近はオーラルセックスでもコンドームにチャレンジしてます）

ご協力いただきました皆様、ありがとうございました。

このイベントは、厚生労働科学研究費（エイズ対策研究推進事業）研究「男性同性間の性行為におけるHIV感染の拡大とその背景」成果等普及啓発事業として開催されました。

LIVING TOGETHER（通称：LT本）の配布状況

ゲイ・バイセクシャルの人を対象とした「LIVING TOGETHER」は、元々Voice02から派生し、その後各方面で好評になる。「LIVING TOGETHER」がゲイ雑誌で紹介されるなど認知度がますます高くなり「是非欲しい」との要望が寄せられ増刷となる。そこで、ぶれいす東京では希望の方を対象に「LIVING TOGETHER」を郵送費のみで配布中（2003年8月現在、郵送数は約130冊）また現在、ゲイバー・ハッテン場でのプロモーションを企画。バーのママやハッテン場の皆様、配布にご協力いただける方は、gf@ptokyo.comまで連絡を。

LIVING TOGETHER 配布状況

3月～8月で、652冊の配布を行いました。

3月：472冊 4月：50冊 5月：20冊
6月：10冊 7月：60冊 8月：40冊

Gay Friends for AIDS 電話相談

3月 12件（平均2.5件）
4月 9件（平均2.25件）
5月 8件（平均1.6件）
6月 7件（平均1.75件）
7月 9件（平均2.25件）
8月 17件（平均3.4件）

Gay Friends for AIDS（Gフレ）

メインイベント「Voice03」決定！

11月29日（土）18:30～at：四谷区民ホールで「Voice03」が決定！「G MEETS」終了もつかの間、早速の準備が展開されている。「HIV予防啓発」イベントとして、HIV予防啓発をイベントという「カプセル」で包み、観客・出演者まるごとHIV予防啓発してしまおうというこのイベント。なんと「Voice」（前身含む）7周年！アニバーサリーとなる今回の「Voice03」では「アニバーサリー」にふさわしい内容で企画中！乞うご期待！ここだけの話「ドラッグクイーン」は増員らしい。（これまた噂）

（文責：ケンイチロウ）

HIV陽性者への相談サービス

相談実績

2003年	3月	4月	5月	6月	7月	8月
電話による相談	45	37	44	41	50	38
面談による相談	33	19	35	24	21	22
E-mailによる相談	58	103	179	106	61	94
うち新規相談	11	10	6	6	9	7

新規相談者の情報入手経路(3～8月集計)46人

・インターネット	19人
・陽性者の知人	4人
・保健所	3人
・行政等の冊子	3人
・医師	2人
・カウンセラー	2人
・ソーシャルワーカー	2人
・雑誌の記事	2人
・他団体	2人
・不明	2人
・電話相談 / 看護師 / ハローワーク / 知人 / もともと知っていた	各1人

まとめ

- ・医療
地方拠点病院での入院 / 歯科治療機関 / 迅速検査での告知 / 在宅療養施設さがし / 他科診療で差別 / 主治医との人間関係 / 薬物耐性検査の受検 / 告知について医師からの相談
- ・引越
海外からの帰国 / 子供の教育 / 医療機関探し / 家族からの帰国にかんする相談 / 日本で未認可の薬剤の入手方法
- ・制度やサービス
高額医療 / 生活保護 / 障害年金 / 生保担当者との人間関係 / ティベア基金 / ヘルパーさんの不安相談 / 生保受給者の転院
- ・身体の変化に伴う生活
副作用が出現 / サイトメガロウイルスでの視力低下 / 悪性腫瘍の治療 / 脳症の方の家族から / プールの利用を制限された / 薬物依存 / 精神症状
- ・就労
職場のストレス / 解雇・リストラ / 企業の人事担当者 / 障害者枠での就労 / 就職活動の方向性 / 適性検査や訓練 / 就職の際の健康診断 / 職場の診断で感染を知る / 中性脂肪・血糖値で2次検査 / 社員から告知された社長から
- ・外国人
自国の状況 / 外国人パートナーから / ビザに関する相談

- ・セクシュアリティの理解
ゲイの子供をもつ母親
- ・子供づくり
体外受精の施設さがし / 人工授精について
- ・コミュニケーション
過剰な援助にうんざり / ストーカー / 脅迫に関する相談
- ・HIV感染の告知や介護
献血で陽性告知 / 妻への告知 / 父親や家族からの相談 / 告知直後の相談 / PML(進行性多巣性白質脳症)家族から / 子供の介護をする母親から / 感染者の親に痴呆が出現 / 家族から本人の具合が悪い
- ・法律
法廷での証言依頼
- ・ぷれいす東京サービス
PGM参加 / 他の陽性者に会いたい / パディ派遣
- ・死別
パートナーが亡くなる / 家族が亡くなった

研究部門

ぷれいす東京では、厚生労働省をはじめとする公的機関から委託を受けて様々な研究活動を行っています。最近の活動内容を以下ご報告致します。

厚生労働科学研究報告

「エイズに関する普及啓発における非政府組織(NGO)の活用に関する研究」(～2002年度)
2000年度より開始された同研究の3年目(最終年)として、異性間・同性間で性行為を行う男子についての調査・メディアにおける保健行動メッセージの分析・青少年啓発プロジェクト(ぷ PEP)の実践等を行い、映像教材「LET'S CONDOMing」を開発しました。

「HIV感染予防対策の効果に関する研究(2003年度～)」
当年度より開始された新研究です。この研究は、青少年の性の保健行動(=性の健康リスクを回避する行動)に焦点をあて、その促進のための手法を検証し、先行研究の分析結果も併せて、有効な教材や手法を開発していくことを目指しています。

「HIV感染者の地域生活支援におけるソーシャルワーカーの連携に関する研究」(2003年度～)
当年度より開始された新研究です。「HIV感染症の医療体制の整備に関する研究」の一環として行われています。研究テーマとして「肢体不自由を併せ持つ感染者の社会福祉サービス利用の阻害要因について」及び「HIV陽性者の就労状況について」の2点を選び、インタビューやアンケート調査の準備を進めています。

お知らせと紹介

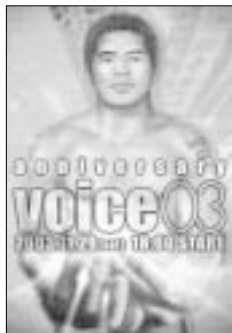
お知らせ

VOICE 03 Anniversary ~それぞれの記念日~

11月29日(土) 四谷区民ホール

17:30 開場

恒例のVOICEが今年も開催されます。ゲイ・バイセクシュアル限定ですが、ご都合のつく方はご参加ください。昨年制作した、LIVING TOGETHERというHIV陽性者、パートナー、友達、家族の手記が収められた冊子は非常に好評で、今でも多くの地域から入手希望の連絡がきます。



今年の制作物は、LIVING TOGETHER マニュアルとオリジナル VIDEO! 抗体検査をうけ、結果を聞くというところから始まるストーリー。仮に「陽性」という結果を告げられたら。その後の展開は? 病院に行く/いかない、彼に感染を伝える/伝えない、別れ/出会いなど、様々な展開があります。見た人が疑似体験できるような内容を予定しています。ご期待ください。

< 出演 >

エスマルダ(ドラッグクィーン) / NOBBY (FROM GOLDEN ROSE) / ディベルティメント(弦楽奏) / スキンエコー(合唱) / ぶれいす東京のVIDEO SHOW

<http://gf.ptokyo.com/voice03>

新宿アルタ前広場、エイズデーイベント

11月30日 14:00 ~ 18:00 厚生労働省、エイズ予防財団といっしょに、ぶれいす東京も参加してステージとブースで共同キャンペーンをやります。飯島愛さんも来ます。

「若者を対象としたセクシュアルヘルスプロモーション」

11月28日、神戸のアートビレッジセンターで行います。入場無料。関西方面の方、ぜひご参加ください。

< 発表スケジュール >

第一部: 13 ~ 15 時

「性の保健行動とジェンダー/ジェンダーに着目した行動科学的アプローチのすすめ」

池上千寿子(ぶれいす東京代表、厚生労働省エイズ対策研究事業主任研究者)

- 映像を使った研究成果発表 + 若者とのディスカッション
・フロアとの交流

第二部: 15 時半 ~ 17 時半

「Sexual Health とメディアの影響 / 啓発冊子及び人気テレビドラマに描写されたセクシュアリティとジェンダー」

東優子(ノートルダム清心女子大学助教授)

- 映像を使った研究成果発表 + 若者とのディスカッション
・フロアとの交流

演劇の紹介

「PRESENT プレゼント 劇団フライングステージ」

< 日程 > 11/19(水) ~ 11/24(祝・月)

< 場所 > 中野 ザ・ポケット

< 予約・問い合わせ > Tel/Fax 03-3316-9091

<http://www.flyingstage.com/>

1992年、関根信一を中心に旗揚げした、カミングアウトしているゲイの劇団である、フライングステージの第25回公演。

(以下 フライヤーより抜粋)

11月に神戸で開催予定だった第7回アジア太平洋地域エイズ国際会議(7th ICAAP)がSARSの影響で2005年に延期になりました。会議に合わせて神戸でエイズの芝居を上演しようという企画は、残念なことに流れてしまったのですがやっぱり今、もう一度、エイズの芝居を書いてみようと思います。(中略)

今、エイズを通して見えてくるのは、「どう死ぬか」ということではなくて、「どう生きるか」ということなのだということと、これまで知り合った多くの感染者のみなさんは教えてくれます。

舞台は2003年の東京、HIVに感染しているとわかったゲイの男の子をとりまく「日常」を何のしかけもなく描いてみようと思います。もちろん、いつもの通りの元気なコメディとして。どうぞご期待ください。(関根)

小説の紹介

「魔女の息子」伏見憲明 著(河出書房から11/22出版予定)

伏見憲明さんの「魔女の息子」という作品が、第40回文藝賞を受賞しました。噂をききつけ、読み始めてビックリ。「本当にゴムつけなくていいの」というセリフで始まる、ハッテン場の暗闇から物語がスタートします。

主人公は、ゲイの貧乏ライターという設定で、読み手は伏見さんをだぶらせませす。主人公の性生活、恋愛や別れ、仕事や同僚との関わりを描きながら、主人公が自分自身の人生の意味づけを探るプロセスが描かれています。さらに、45歳の私自身が素通りできない、若い、家族などのテーマがちりばめられていて、ついつい引き込まれてしまいました。

HIVが日常生活の中で出会う事柄として描かれていて、とても好感がもてました。主人公が、カミングアウトしているゲイのHIV陽性者に取材する場面があり、実はすでに出会っている人であったりと、読んでいてドキドキしてしまいました。

この作品を読みながら、以前、伏見さんが言っていたことを思い出しました。「もっと、感染に到るまでの経緯とか、それに到る背景が語らなければ読み手にリアルに伝わらない。」手記とは違うフィクションだからこそ伝わる何かがあると実感しました。

(生島 嗣)

編集後記

- ・今回佐藤さんのピンチヒッターということで、お手伝いさせていただきました。増刊号だったんですね.....。(こんどう)
- ・夏・秋増刊号!ぎゅっしりつまった16ページでおおくりしましたが、いかがでしょうか?今号は総勢27名の原稿と、多くの人たちの協力があっていきます。みなさんありがとう(やじま)
- ・新スタッフを迎えてのニュースレターいかがだったでしょうか?今後もフィールドから生の声をお届けする予定です。これもあれも、やりたいことが一杯あります。楽しみにしてください。(いくしま)

編集・発行: ぶれいす東京

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-22-46 ザ・テラス304

TEL: 03-3361-8964(月・金 12:00~19:00)

FAX: 03-3361-8835

E-mail: info@ptokyo.com

ぶれいす東京HP: <http://www.ptokyo.com/>

Gay Friends for AIDS: <http://gf.ptokyo.com/>

web NEST: <http://www.jade.dti.ne.jp/~nest/>

Sexual Health: <http://shw.ptokyo.com>